

研究活動

氏名 戸來知子

著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表 の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概 要	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
(著書) 教職基礎論	共著	2009. 4 (平成21年4月)	サンライズ出版	教職に就いた時に実践的に使える基礎知識がまとめられている。その中で、カウンセリングやエリクソンのライフサイクル論について、教育相談や生徒指導の基礎的な考え方を述べている。	伊藤一雄・山本芳孝・池上徹・奥山研司・中西仁・山脇雅夫・戸來知子	pp. 76-82.
(学術論文) 「『知育』としての教育が自我形成について果たす役割について一考察-E. H. エリクソンとP. H. フェニックスの理論に基づいて-」	単著	2009. 4 (平成21年4月)	関西教育学会年報通巻第3号	P. H. フェニックスは『意味の領域』や『コモングッドへの哲学』において、学校教育の教科の学習では、何をどれだけ学ぶのが適切であるかを論じている。さらに、エリクソンの理論を援用して学習と発達段階を考慮している。本稿では、学校教育の教科の学習とアイデンティティの確立との関連性について論じた。教科として学ぶ歴史や自然科学の知識は自分自身を客観的に見つめることに貢献している。「知る」ことで初めて見えてくるものは多く、価値発見のプロセスはアイデンティティ形成に寄与していると論じた。		pp. 36-40.
「経験と自我の成熟との関連性-E. H. エリクソンの理論に基づいて-」	単著	2010. 10 (平成22年10月)	日本デュエイ学会紀要第51号	本稿ではエリクソンのライフサイクル論に基づいて、経験するということが自我の成長・発達にどのように関わっているのかということを開明した。ライフサイクル論では、乳児期から自我の強さの積み重ねで、人間は成長していく。自分の経験は「心理-社会」的な経験として捉え直される。その時に、同時に「意味経験」という自我の経験が作用していることを論じた。他方で、自我の強さを育む経験は、人と人のかかわりあいである「相互性」によっても支えられている。「相互性」と「経験」の相補的な作用について論じた。		pp. 101-110.
「経験と自我の成熟との関連性-E. H. エリクソンの理論に基づいて-」		2012. 10(平成24年10月)	日本デュエイ学会紀要第53号	本稿では、エリクソンのライフサイクル論に含まれる超越性の問題を自我と相互性の観点から論じた。ライフサイクル論における超越の問題については、先行研究で論じられている「発達における自己超越」以外にも超越性が含まれていることを論じた。その超越性を「内在的超越」として論じた。この「内在的超越」は現実の人である「他者」に支えられての超越であり、この超越によって、「生の質的転換が」でき得るということを論じた。		pp. 47-58.
「統合と生涯教育との関連性-E. H. エリクソンの理論に基づいて-」 エリクソン		2012. 10(平成24年3月)	京都精華大学紀要第40号	生涯学習社会においては、教育は将来の準備という側面だけではない。いくつになっても人は学ぶ主体であるべきである。この視点から、アンドラゴジーを始め、教育老年学で言われている学びの目標について論じた。とりわけ、リンデマンと枕スキーの見解を援用して、高齢者の学びの最高の目標とされる「超越」について論じた。		pp. 172-181.
※著書、学術論文、その他の別で列記してください。枠内の( )の位置は分量に応じて変更してください。						
「ライフサイクル論における遊びと超越に関する一考察-E. H. エリクソンの理論に基づいて-」		2014. 10(平成26年3月)	京都精華大学紀要第44号	エリクソンは、著書、『玩具と理性』において、子どもの遊びが発達に大きく貢献していることを論じている。遊戯療法や、ホイジンガの見解を援用して、遊びが「自己遊戯」的に子どもの悩みを解決している。遊びが問題解決に寄与することは、子どもだけでなく大人もまた然りである。しかし、エリクソンは大人の遊びの持つ危険性について論じている。遊びは皮肉にも、遊びを制約する「儀式性」によって支えられている。		pp. 148-155.

<p>「E. H. エリクソンのライフサイクル論における横軸への超越について」一考察</p> <p>— J. M. エリクソンの老年的超越からの示唆 —</p>		<p>2014. 10(平成26年12月)</p>	<p>名古屋大学大学院教育発達研究科紀要(教育科学) 第1巻第1号</p>	<p>16」によつて示されている。</p>		<p>pp. 47-58</p>
<p>「自己肯定感を育む学級活動-学校行事を中心とした取り組みから-</p>		<p>2017. 3(平成29年3月)</p>	<p>精華教育学研究 2016年度下期報告集</p>	<p>特別活動の様々な取り組みを通して、生徒が相互にコミュニケーション力を養い、お互いを理解し、自分自身の自尊感情などを高めていけるような教師の拝領と指導を高野山高校の取り組みを事例としながら考察した。</p>		<p>pp. 133-142</p>

所属	文学部	職名	准教授	氏名	戸來 知子	大学院の授業担当の有無 ( )
教育活動						
教育上の主な業績		年月日		概要		
1. 教育内容・方法の工夫 (授業評価等を含む)				少人数なので、小レポート、レポートの書き方練習などを行っている。学期末のレポートは必ずコメント、手直しを加えて返却している。		
2. 作成した教科書、 教材、参考書				特になし。		
3. 教育方法・教育実践 に関する発表、講演等 (直近2年のみ記す)				特になし。		
4. その他教育活動上 特記すべき事項				特になし。		